
「誰か」の理想郷

ヨルタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「誰か」の理想郷

【Nコード】

N4706Z

【作者名】

ヨルタカ

【あらすじ】

とある高校の2年生、結城涼香^{ゆづきすずか}。彼女の或る日見た夢でなぜか友人の宮内舞^{みやうちまい}と出会い、そのめちゃくちゃな設定に振り回されていく

…

一目目々全力疾走

「はあ…はあ…」

深夜11時、コートを来た少女は自宅に向かって自転車を飛ばす
なぜこうなったかという彼女の所属している部活が、何故かこん
な時間まで延びてしまったから

彼女の名前を、結城涼香（ゆうき すずか）という

「…まったく…なんでこんな時間まで…」

普段なら帰り道の同じ友人が居るが、今日は用事で先に帰られてし
まった

様々な独り言を呟き続けて自転車をこいでいる、と、前方に犬のよ
うな動物がいた

（…野良犬？）

少し考えたが、今は構う余裕もない、少しスピードを落として犬を
よけてそのまま進む

しばらく走り信号で止まっていると、後ろから妙な気配を彼女は感
じた

というよりも、止まったことでより強く感じたと言う方がいいのか
もしれないが

それは犬が走った後の息遣いによく似ていた

（…これって…）

彼女は後ろをゆっくり振り返ると…そこには予想通りの先ほどの獣よく見ると瞳は赤く、毛は黒い狼のようだった
後ろには…5匹仲間を引き連れてうなり声をあげている

「やっぱりっ…!」

あわてて再びこぎだす、こうなれば信号なんて関係ない 幸い曲がり角を使って帰れる家だった、

撒ける可能性は0ではない…はずだと考えていた

夢中で走り抜け、自宅のあるマンションの駐輪場前の広場にたどり着く

体はへとへとの上、周りに先ほどまでの気配はない

「…っ…!」

気がつくと、中学時代に抜けた膝がまたズレかけて、その場に座り込む

肩で息をしてあたりを見渡すそして彼女の目にしたものは、簡単に彼女の安心をかき消した

植え込みの陰の…たくさんの赤い瞳

「…っ…そ…!？」

もう、逃げられない、隠れることもできない

獣はゆっくり歩み寄る、当然だ、あわてる必要などない

もはや相手は逃げないのだから

結城は獣と睨み合う、だが彼女は半分あきらめていた

(こんな、わけわかない状況で死ぬなんて…)

次の瞬間、彼女が耳にしたのは… 彼女の肉を裂きにかかる獣の声ではなく、犬のような情けない悲鳴

(え？なにこのご都合主義展開)

余りに都合の良すぎる展開に、彼女は身構える獣を倒した相手が例え知り合いであろうと、だ

「大丈夫…？今度は結城さんか…」

「今度つて…私以外にもいるの？宮内」

笑いながら近づく相手を見つめて、苦笑いで結城は返す

相手は宮内舞、中学時代からの同級生、今は結城と同じ部活ともう一つを兼部している

その宮内が結城を庇うように立って獣達に向かう

「あのさ…大丈夫？」

目の前に立つ宮内に言つと相手は軽い調子で右手に握っているものを見せて答える

「大丈夫大丈夫、私武器あるし」

「は？武器？」

宮内が見せたのはムチ、だがそんなもので手に入れたのだろうか、

その疑問を相手にぶつける前に、宮内はさっさと手馴れた様子で獣を追い払っていた

ふう…と息をついて宮内は結城の前に立つ

「あのさ…とりあえず聞きたいことは沢山あるんだけど」

目の前の状況が何一つ整理し切れていない彼女はまず目の前の友人のことからつつこんでいくことにした

「そのムチ…どこから…まさかコスプレ用品？」

「さあ？そこらへんに落ちてたし、結城も何か拾えるんじゃない？」

およそ現代では手にすることなどないであろう物を持っている宮内に、

彼女の趣味を踏まえて結城は尋ねるがあいては軽い調子でそう言うだけ

「そこらへんって…落ちてるようなもんじゃないでしょ？それ」

「うーん…まあ多分これ夢だし」

「…ふうんそっか…て夢？」

相手があっさり言ってしまうのでうっかり聞き流すところであったがもう一度結城は相手に問いかける

「そう、夢、じゃないとこんな展開ありえないでしょ？」

「じゃあなんで助けたの？」

「それはなんとなく？」

「ていうか誰の夢なの？」

「起きてからのお楽しみ」

疑問をぶつけてもアバウトな返事しか返ってこない
これ以上何を質問しても無駄なのではないか？という考えさえ浮か
んでくる

「まあいいけど…で、これから私はどうすればいいの？私膝抜けて
動けないし」

「うーん…そろそろ目覚めるんじゃない？時間的にも」

「え、ちょ、まっ」

「…」

ぼやけた視界で2段ベットの下である木の板をぼーっと見つめて、
ハッキリしない意識で携帯で時間をかくにんする

(…6時…50分…)

いつもより早い起床のためか、少し鈍い動きでベットに座り先ほど
のことに意識を回す

彼女自身、夢を記憶することは珍しい上、ここまで変な夢を見ても
大して深くは考えない彼女はただ

(…変な夢…)

とだけ思い、リビングへ向かっていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4706z/>

「誰か」の理想郷

2011年12月15日23時50分発行